

## 「博士論文」 合否査定資料

申請者  
職・氏名 万 礼

---

学位の名称 博士（日本語日本文化）

---

---

論文名 日中両言語における数字を含む同形副詞の対照研究  
— 副詞と動詞とのコロケーションを中心に

---

審査委員 主 査 村木 新次郎

---

副 査 小林 賢章

---

副 査 于 康

---

審査結果 合

2017.2.16 日本語日本文化専攻博士後期課程委員会 承認

2017.2.16 文学研究科博士後期課程委員会 承認

# 博士学位論文審査結果報告書

2017年 2月 16日

学位申請者	万 礼		
審査委員	主査	村木 新次郎	印
	副査	小林 賢章	印
	副査	于 康	印

この論文は、日本語と中国語における、当該の単語の内部に数字をふくむ副詞（たとえば、「一一」「一度」「再三」など）とその単語のかかり先である動詞とのあり方と、そのくみあわせ全体が文の中でどのような特徴を有するのかを検討し、両言語の異同を考察したものである。

副詞や日中同形語に関する研究は数多く存在する。しかし、著者の考察対象とした領域についての研究は必ずしも多いとはいえない。本論文では、副詞と動詞のコロケーションのタイプわけ、同形副詞と、そのかかり先である動詞の意味論的・文法論的な諸問題について、大量のデータを、定性的かつ定量的に精査し、その結果に考察をくわえたものである。従来の研究に比べて、考察の対象語を、意味論・文法論・文体論などの視点から多角的にとらえたものとして貴重な成果であると評価できる。

著者は日本語教育を専門とする学徒ではあるが、日本語学と中国語学にも広範な学識をそなえていることが随所にうかがわれる。本論文は、それらが有効に活用され、論文の構成においても確固たる形式を整えている。

本論文は、博士（日本語日本文化）（同志社女子大学）の学位論文として十分な価値を有するものと認める。

# 博士学位論文審査結果要旨

2017年 2月 16日

学位申請者	万 礼		
審査委員	主査	村木 新次郎	印
	副査	小林 賢章	印
	副査	于 康	印
論文題名	日中両言語における数字を含む同形副詞の対照研究 —副詞と動詞とのコロケーションを中心に—		
<p>この論文は、日本語と中国語における、当該の単語(以下、対象語という)の内部に数字をふくむ副詞(たとえば、「一一」「一度」「再三」など)とその単語のかかり先である動詞とのあり方を検討し、あわせて、それらのくみあわせ全体がどのような文法的な特徴を有するかということ整理し、両言語の異同を考察したものである。</p> <p>日中両言語における同形語に関する研究は、すでに多くの蓄積がある。そのような状況のなかで、本論文の特徴は、対象を「数字を含む同形語」に限定し、両言語のコロケーションのタイプとその構成要素やコロケーション全体の意味論的な特徴や文法論的な特徴を、データベースにもとづき、定性的かつ定量的に調査し、その結果を検討したところにある。また、日本語における中国語を起源とする漢語と、その単語と類義関係にある日本語固有の和語との競合関係に分析がおよんでいることも、本論文の特徴であるといえる。ちなみに、類義関係にある漢語と和語の具体例をあげると、中国語の“一一”と、日本語の「イチイチ」「ひとつひとつ」とが対応する、1対2の関係を呈する。それらの使われ方を考察すると、中国語の“一一”は日本語の「ひとつひとつ」の用法に類似し、中国語由来の日本語の「イチイチ」は“一一”や「ひとつひとつ」とは異なる</p>			

る特徴をもっているという指摘は貴重である。日本語の「イチイチ」と「ひとつひとつ」には棲み分けが生じていて、このような言語事実は興味深い結果であるといえる。

今日、データベースの拡充によってコロケーションに対する関心が高まっている。しかし、コロケーションの定義にも諸説あり、日本語・中国語ともに、言語単位をめぐる統一した見解がなく、いくつもの異なる立場がある。言語研究の世界で、コロケーションが重視される中で、副詞と動詞とのコロケーションをあつかった研究は少ない。どちらの言語にあっても副詞は意味的にも文法的にもあつかいが困難な単語群である。著者は、考察の対象語である副詞の動詞に対する機能として、「量規定」「質規定」「方法規定」があるとし、さらに「量規定」を「連続的な量規定」と「非連続な量規定」とに区分して、日中両言語の同形副詞の異同を整理している。対象語の中には、以上のような動詞を規定するという機能をうしない、その位置を動詞から離れて前方にうつし、もっぱら言語主体によるモーダルな意味をになうものも存在するという指摘は重要である。副詞が用言を修飾するという本来の機能をうしない、みずからの語彙的意味をうしない、もっぱら文法的にふるまうという単語に変質する現象であるこの事実は、語彙的意味をもつ単語が文法的な品詞である文副詞・陳述詞へと移行する文法化の例とみられる。さらに、対象語が主節の中で用いられる場合と従属節の中で用いられる場合とで違いがみとめられるという興味深い指摘もある。「原発が ひとたび 大事故を起こした場合、」「ひとたび 祝宴が終わると、」のような例では、回数の意味より条件節を誘導するはたらきをする文法的な単語とみてとれる。

述語として文のかなめの役割をはたす動詞には形態論的なカテゴリーが発達している。「認め方（肯定・否定）」で、否定の用法に傾斜するもの、「アスペクト（継続動詞・非継続動詞）」で、非継続動詞に傾斜するもの、アクチュアルな用法とポテンシャルな用法のいずれに傾斜するかといった報告も貴重である。著者の記述の中には、いまだ研究の萌芽の段階にとどまっているとみられる部分もあるが、それらについては、著者の今後のさらなる発展を期したい。

著者が分析の対象とした日中両言語の同形副詞は限られてはいるが、言語事実を多面的にとらえて整理したことは、高く評価できるものである。本論文は、全体の構成において確固とした体裁をそなえており、専門分野の術語の使い方についてもおおむね妥当である。

本論文は、博士(日本語日本文化) (同志社女子大学) の学位論文として十分な価値を有するものと認める。

# 博士学位論文内容要旨

2017年 2月 16日

学位申請者	万 礼		
審査委員	主 査	村木 新次郎	印
	副 査	小林 賢章	印
	副 査	于 康	印
(要旨)			
<p>本論文は、日本語と中国語における数字を含む同形副詞と動詞とのコロケーションを中心に、日中両言語において、コロケーションを構成する単語の意味的な特徴および、コロケーションの核となる動詞の意味的特徴と文法的（形態論的かつ統語絵論的）特徴の共通点と相違点を考察したものである。たとえば、中国語における“一一”と日本語の「一一（イチイチ）」は同形の副詞であり、両者を依存語とし、支配語である動詞との意味・文法上の諸特徴を、大量のデータベースから得た当該の用例を整理・分析し、それに考察をくわえたものである。なお、考察の対象となるものの中に、日本語で、中国語起源である「漢語」と日本語固有の「和語」が競合しているものが存在する。たとえば、「一一（イチイチ）」と「ひとつひとつ」がその例である。日中同形語にくわえて、このような日本語における漢語と和語の関係にも考察の範囲をひろげたことは本論文の特徴のひとつである。</p> <p>本論文の構成は以下のとおりである。</p> <p>序論 本論文の課題および先行研究</p> <ol style="list-style-type: none"><li>1. 本研究について</li><li>2. 日中両語の副詞について</li><li>3. 中日同形語に関して</li></ol>			

## 第一部 副詞と動詞とのコロケーション

1. コロケーションとは
2. 新川忠(1979)「副詞と動詞とのくみあわせ試論」
3. 数字を含む二文字副詞と動詞とのコロケーションに見られる特徴

## 第二部 数字「一」／”一“を含む中日同形副詞

- 第一章 「一一」「一つ一つ」と”一一“
- 第二章 「一度」「ひとたび」と“一度”
- 第三章 「一旦」と“一旦”
- 第四章 「一向」と“一向”
- 第五章 「一概」と“一概”
- 第六章 「一斉」と“一斉”
- 第七章 「一挙」と“一挙”
- 第八章 「一時」と“一時”

## 第三部 「再」／“再”を含む中日同形語

- 第一章 「再度」と“再度”
- 第二章 「再三」と“再三”
- 第三章 「再び」と“再”

## 終章 結びと今後の課題

## 補充 日本語の類義語「思わず／うっかり」の動詞との共起

第一部では、著者が当該の研究課題に対峙するにあたって、日中両言語の副詞の位置づけとその範囲、同形語の定義、コロケーションとはなにかという問題に言及している。副詞は、日中どちらの言語にあっても、複雑な様相を呈し、意味論的にも文法論的にもその整理・分析が困難な単語群である。両言語における副詞研究史を素描し、同形詞の定義づけ、コロケーションに関する諸説を整理し、みずからのスタンスを表明している。

第二部と第三部は、11例の日中同形副詞と動詞とのコロケーションについての考察結果である。個々の考察にあたって、著者は、コロケーションを構成する副詞と動詞の語彙的な意味の特徴と文法的な特徴の双方に注目したうえで、コロケーションのタイプを提言している。次に、動詞の語彙＝文法的な側面から分類したすぐれたシソーラスと評価のたかい『分類語彙表』を援用し、データベースから得た実例を、日中同形副詞がむすびつく動詞の意味的タイプを定性的かつ定量的に整理している。さらに、動詞に支配される主語・補語などの文の骨格を構成する全体（節もしくは文相当の形式）の文法性を問い、考察対象の同形副詞の分析に迫っている。著者の分析にかかわる項目を列挙すると、以下のようになる。

#### 語彙的な特徴の抽出

依存語としての当該の副詞について

1. 当該の副詞が数量に関して、不連続な性質をもつものと連続的な性質をもつものとの区別

2. 数量的な意味からはなれ、言語主体の陳述的な意味を担っているものの指摘  
支配語としての動詞について

1. 『分類語彙表』にもとづく意味上の分布別による統計的な調査。

2. 人間主体による（物理的・社会的・精神的）動作と非人間主体による動作との区別による分析

#### 文法的な特徴の抽出

依存語としての当該の副詞について

1. 副詞の位置が動詞の直前か・文頭かによる分析

2. 主節にあらわれるか・従属節にあらわれるか

3. 日本語の漢語と和語の類義語が競合する場合：両者の異同の考察

支配語としての動詞、ならびにその動詞に支配される主語・補語などをふくむまとまり（節＝文相当）の特徴

1. 動詞の形態論的なカテゴリーに（「認め方（肯定・否定）」「アスペクト（継続動詞・非継続動詞）」「アクチュアル・ポテンシアル」）にもとづく偏りの有無

2. 文のモダリティ（平叙文・命令文など）との関係

終章では、各部のまとめと今後の課題をまとめている。

本論文は、中日同形副詞と動詞とのコロケーションのタイプと構成要素と全体について、意味と文法から迫った試論である。

# 試問結果の要旨

2017年2月16日

学位申請者	万 礼	
審査委員	主 査	村木新次郎 印
	副 査	小林 賢章 印
	副 査	予 康 印

審査員3人は、2017年2月16日11時から12時20分まで、学位申請者である万礼氏に対し、本論文に関する公開の試問を行なった。はじめに、申請者による口頭での論文要旨の発表があり、続いて審査員から申請者に、日中同言語における副詞の位置づけとその範囲をめぐる問題、同形語をどのようにとらえるのか、コロケーションをどのように位置づけるか、日本語の中の漢語と和語との関係をめぐる問題などについて質問や疑義が寄せられた。それに対して、申請者は概ね的確な回答をした。回答を通して、申請者が中国語と日本語の言語現象に対して深い理解と見識をもっていること、事例を鋭く分析する能力を備えていることが確認された。よって、本論文の提出者万礼氏が博士（日本語日本文化）（同志社女子大学）の授与に値する十分な学力を有するものと認める。